蓄積過程を論じている。内容の殆どが一般に知られていないオリジナリティに満ちたものである。また、「地域学」的展開ではなく、開かれた知の体系として論じている。

（３）本論文の特徴

本論文は、筆者が３６年間の新居浜市職員として、一部愛媛大学教員として、さらに全国の人的ネットワークを駆使した市民活動の実践経験をベースとして執筆したものである。実践現場に内在しつつ（実践主体として牽引）、実践現場である論文対象を突き放しつつ客観的に論じる努力の中で生まれたものである。ゆえに、本論文は実践現場における有効性の検証を基に執筆されているという特徴を持つものである。

（４）本論文に収録した既出論考等について

第２部第１章「産業おこし・地域づくり現場実践論」は、「地域が知を創造・編集・実践する時代」（『判例地方自治』NO２６３）と「新居浜市－新産業は創造できるか」（『地域開発』VOL２７７）を、 第２部第２章「企業都市における市民のまちづくり」は、「同表題」（『瀬戸内産業文化研究』VOL３）を、第２部第３章「新居浜市中小企業振興条例の成立」は、「新居浜市産業政策の新展開」（『瀬戸内産業文化研究』VOL９）を、第２部第４章「紙産業都市における産学協働人材育成拠点の形成」は、「地域産業に根ざした人材育成拠点マネジメント」（日本地域経済学会発表草稿）を、第３部第１章「「産業観光」が拓く知の世界」は、「同表題」（『運輸と経済』VOL６８第６号）を、第３部第２章「新居浜市産業遺産活用運動史論」は、「産業遺産を活かした産業文化都市の創造」（中嶋信・橋本了一編『転換期の地域づくり』ナカニシヤ出版）、「産業遺産活用運動と地域づくり」（文化経済学会＜日本＞年次大会発表草稿）、「「遠計」の知的都市・新居浜へ」（『観光文化』VOL２３巻第２号）を、第４部第１章「工都形成期の知的記憶資産の考察」は、「工業都市の知的財産形成と知識人」（文化経済学会＜日本＞年次大会発表草稿）を、それぞれ収録・加筆執筆したものである。その他は、新たに書き下ろした。

（５）本論文の今後の発展展開について

本論文における「産業文化創造都市」の「産業」は「鉱工業」を指しているが、今後の展開は生物資源を対象とした「農林水産業」を包摂した「生命経済論」として発展させなければならないと考えている。それも都市と農山村を含めた「生命経済地域創造論」として、である。なお、未定稿で本論文に収録できなかった「工都成立期における鷲尾勘解治の果たした役割と今日の新居浜」の完成、資料収集を終え本論文でその一部を取り上げた明治大水害の単著としての出版、筆者が市職員在任中に担当した愛媛テクノポリスと東予産業創造センター建設の今日的検証等により、さらに充実されなければならない。また、本論文で取り上げた新居浜市、四国中央市以外の全国の、海外の地方工業都市への適用発展展開をめざさなければならないのである。

四季録

大正十年十月、本多静六は講演のため大分県由布院を訪問した。演題は「由布院温泉発展策」。講演要旨を見てみよう。

「町全体を森林公園にして、その中に町があればよい」「森林公園はシンプルではダメ、広葉樹を混ぜて植える。道路と建物以外は人の手を加えたことを見せないように工夫する」「人の歩く道は一定の幅にする必要はない。また、曲がり道、坂道もあればよい」「自動車道としての大回遊路と歩行者散策道としての中回遊路、この二つの間には、名所旧跡を結ぶ生活道としての小回遊路の配置」「温泉に入り飲食して寝る温泉地から野外活動のできる健康第一の由布院を」などである。

ドイツのバーデンバーデンをイメージしたこの提言は、八十五年の時を経た今日、由布院のいまだに到達すべき未完の目標である。まちづくりリーダー中谷健太郎、溝口薫平氏等は本多を招いた

緑に埋もれた町

当時の先人たちの先見性に思いを馳せてきた。

本多静六とはどのような人か。彼は、明治―昭和にかけて、日本の林学、造林・造園学の基礎を築いた公園の父。ドイツ留学し、我が国初の林学博士となり、日比谷公園、明治神宮神苑など全国の有名な公園の設計・改良をした人。

本多博士は新居浜市の歴史にも登場する。彼の新居浜訪問は明治三十五年五月。政府の鉱毒調査会委員として公害調査に来た。この時、一宮神社の社叢を視察して「これは立派な自然林だ。クスノキの大木の多いことは全国どこにもない。その中に生えているカクレミノは珍しい植物で、かつてロシアの博覧会に出して金杯を受領したことがある」と語った。

昭和二年、白石誉二郎新居浜町長（後の初代新居浜市長）はこの本多の言葉を紹介。さらに「彼の来訪のずっと前にこのクスノキを伐って基本財産をつくろうという説が出たとき自分等は青年であったが極力その非を主張した。この話を聞いてよく伐らなかったものだと思った」と語っている。現在の新居浜市まちなか九十本のクスノキ群残存物語である。

かつて環境問題で苦労した新居浜市。鎮守の森に閉じこめた緑から、由布院的に町全体の森林公園化をめざすのも一つの選択。緑に埋もれた美しい地方工業都市。夢はるかではある。

（森賀 盾雄・愛媛大客員教授）

(第3種郵便物認可)

四季録

都市の記憶を追って十年くらいになる。「歴史を消し去る歴史の上には、流れ去る記憶しか残らない」との都市計画学者鈴木博之の言葉にこだわり続けている。

昭和十（一九三五）年十月六日、ある都市計画家が都市計画設計のために新居浜を訪れた。その年の五月四日に、新居浜町、金子村、高津村、泉川村、角野村、中萩村が新居浜都市計画区域に指定されていた。新居浜町は、愛媛県を通じて後藤新平（都市研究会会長・内務大臣）に専門家派遣を依頼していた。彼は、それを受けての訪問であった。

忘れられた都市計画家

昭和七年から新居浜大築港事業の本格化により工業都市化が加速した。人口増による新築ラッシュ。新居浜・西条を結ぶ県道はできてきたが、他の幹線道路はお粗末。投機のための土地利用も顕著で、街路計画と用途地域の設定が急がれていた。新居浜市誕生目前だが、海岸部の工場地帯と国鉄新居浜駅を結ぶ十分な道路もなかった。

彼は新居浜平野の小高い山に登り、指定区域を回り、工場地帯や別子鉱山の採鉱施設や四阪島製錬所を視察し、愛媛県の土木技師に細かな作業指示をしながら新居浜都市計画を描いていった。彼は昭和十一年十二月、十二年五月、同年十月、十二年十一月三日の新居浜市制施行後の十三年四月に、それぞれ数日間新居浜に滞在し、街路網と用途地域計画図面を仕上げていった。

昭和十四年に二十九路線の新居浜都市計画街路決定、昭和十五年には、愛媛県内で初めての工業・商業・住宅地域、未指定地に分けた用途区域が指定された。

彼は、住友が進める工場地帯化を追認し、海岸部大江の運河の設定、市街地の墓地移転、各地域の公園配置も計画した。街路事業残地のポケットパークも提案した。しかし、戦争によりごく部分的な実現となり戦後に引き継がれた。

彼は山田博愛という。当時、後藤の主催する都市研究会理事で日本大学工学部教授であった。しかし、彼の最大の功績は、関東大震災で崩壊した帝都の復興原案をつくり現場責任者も務めたことである。

しかし、今、新居浜都市計画を山田が作成したことを知る人は皆無に近い。

（森賀 盾雄・愛媛大客員教授）